

欧州から ニッポンをみる

『男中心社会では 成熟国家にはなれない』

263

在仏コラムニスト 安部雅延

男社会の劣化

森友学園への国有地の不当な値段での売却や、今治市の獣医学部新設で公正さを欠く審査があったとされる加計学園問題が、安倍政権を揺るがしている。自民党に代わって政権を担当できる政党不在の中、日本の政治は混乱が続いている。

これらの問題で何度も登場したのは、『付度』という言葉で、昨年の豊洲の盛り土問題に始まるさまざまな不祥事を解くキーワードの一つになっている。強い権限を持つ人物に対して、部下たちは善かれと思つて付度して動き、結果的には逆の結果をもたらしたというものだ。

しかし、昨年来起きているさまざまな問題を解くキーワードは『付度』だけではない。もう一つは『男の論理』ではなからうかと筆者は考えている。つまり、面子を重んじる男社会が機能不全に陥っていると言えるからだ。

異文化研究の分野で世界的に知られるオランダの社会心理学者、ヘールト・ホフステードが数値化を試みた国民特性の文化分類がある。その中の「男性らしさ、女性らしさ」の文化モデルで、日本は世界的に断トツに男性らしさの数値が高い。逆に男性らしさの数値が低いのはスウェーデンなどの北欧諸国やアジアではタイの数値が低い。この分類

は男性が社会の主要ポジションを占め、企業では管理職、国家では政治家や官僚の大多数を男性が占めていることを意味する。

ホフステードの定義では、男らしさは人生において地位や業績、成功を重視し、男女の役割分担が明確化され、給与、昇進、やりがい等重要視することを意味する。競争を好み、他の人との優劣を追求し、働くことを中心に考える社会だ。

逆に女らしさの定義は、生活の質他者への奉仕や支え合いを大事にし、強い自己主張は好まず、男女の役割は重なり合い、家族と過ごす時間を優先的に考える社会とされる。共感や安心、喜びが重視される。

日本人の場合は仕事中心の男社会である一方で、性格的には男女を問わず、激しい対立や自己主張を好まず、コンセンサスが重視される女性的性格が強い社会でもある。そのため個人的には、ホフステードの分類だけでは、正確に日本人の国民性を理解することはできないと考えているが、それでも男性中心社会であることは否定できない。

実はホフステードのデータでは、アングロサクソン系の米英などは男

らしさの数値が高いのだが、それでも日本の6割程度の数値に過ぎず、中国も日本よりはかなり低い。

昨年、豊洲市場移転問題で揺れた都議会最大会派の自民党の大多数は男性であり、森友学園や加計学園問題の関係者も全て男性だ。唯一、森友学園問題では安倍首相の昭恵夫人と自衛隊の南スーダンの日報隠蔽疑惑で追求を受けた稲田防衛大臣が女性だが、日報隠蔽で責任逃れに奔走するのは防衛省幹部の男たちだ。

彼ら政治家や官僚たちの対応を見ていると曖昧な説明の背後に、男の面子と責任追求をかわしたい男の心理が見え隠れしている。実は東芝などの大企業の陥る不正も同じことが言え、成熟国家をめざす日本の問題の一つが浮き彫りになっているように見える。

極端な男性社会の是正が必要

権威主義的な男中心の縦社会では、立場とかポジションの絶対性から、その地位にある者が自省することが少ない。日本のように下が上を支える文化では、部下がどうあるべきかは強調されるが、トップがどうあるべきかは教える人がいない。



例えば、私が教鞭をとった欧米のビジネススクールでは、管理職としてどうあるべきかを若いときから教える。意志決定者として、ヴィジョンや方向性の決定の方法とそれをどう示し、どのように人を動かしていくのかを、過去の指導者などの教訓を交えながら教えている。

バブルが弾けるまで総合雑誌の編集者だった私は、当時、多くのビジネス雑誌が帝王学を扱っていたことを記憶しているが、今は見る影もない。中身のないリーダーが企業を率いれば、企業は終わってしまう。

日本は、男性中心の権威主義が形骸化し、資質を持ったリーダー不在の中、忸度だけが渦巻き、全てが機

能不全に陥っているように見える。

勝手に忸度した側も判断力のないリーダーも保身のために隠蔽に忙しく、責任逃れに必死な姿が見苦しい。今となっては上司や部下の罪まで背負って責任をとる覚悟のある上司はいなくなったのかと言いたくなる。

さらに批判する側も、事の本質からズレ、安倍政権の面子潰しにだけ躍起になっている。稲田防衛大臣の責任追求では、なぜか防衛省幹部が稲田氏に不利な情報をマスコミにリークし続けている。面子を重んじる男性幹部が女性上司潰しをしているようにしか見えない。

無論、女性が男性に取って代われば物事がうまくいくなどという話で

はない。男性と女性にはそれぞれ得意分野があり、短期間の戦時では、男性リーダーの方が力を発揮しやすい。しかし、成熟社会では女性の方が有用で、例えば大手家電メーカーは近年、女性の意見を積極的に取り入れた製品開発で成功している。

洗濯機や掃除機は女性が使う事の方が多いの、それを開発するのは競争好きで高機能を追求する男性エンジニアで、女性消費者は軽視されてきた。マネジメント分野でも、非生産的な意味のない男の面子の争いで仕事が進まないことが表面化し、意思決定プロセスが曖昧化し、責任の所在も不明確になる現象が起きています。

と女性は、対立関係ではなく補完し合う関係で機能しているはずだ。またさうあるべきだ。

そこには人間としての優劣はない。男女平等が最も進むとされるスウェーデンを過去に取材した時、多くの女性が働くために自分の子供を保育園に預ける一方で、実は彼女らの職場も保育園だったという矛盾が問題になっていた。今では子供との時間を大切にしたい女性のために就業時間に柔軟性を持たせている。

アメリカに住む友人の日本女性は日本で大学を卒業し、数年日本で働き、男性中心社会に絶望し、アメリカに渡った結果、アメリカは弱肉強食社会なので女性に機会を与えられても能力のある男性が有利という現実には直面したと言っている。

確かに決断力や統率力は男性の方があがるかもしれない。しかし、決定に到るプロセスに女性が関与することや、プランの実現に向けての細かい心配りは女性の方が得意だ。そんな適正も重要だが、もっと重要なことは、男性と女性が同等なコミットメントを行う組織を作ることだ。

組織が男性の論理だけで動くことは片方のエンジンだけで飛行する飛行機のように、いつ墜落してもおかしくない。地球に同数存在する男性

女性が主導権を握れば問題解決するという単純な話でもないが、日本は極端な男中心社会なために、事態が悪化したときにも助かる道がない。それにアジアは全体として世界的に見て女性役員数が最も少ないのも事実。成熟国家をめざす日本は、男の論理だけで国や会社を運営する状況を早く脱する必要があるのではないかと思う。